

『萬葉集』に於ける夢の一考察

村松正明*

目 次

1. はじめに
 2. 魂の逢い
 3. 夢の呪術
 4. はかなき夢
 5. おわりに
-

1. はじめに

『古事記』（5例）や『日本書紀』（12例）には神の夢告の話が少なからず記されているが、記紀歌謡には夢の歌が全く見えず、夢が歌語として用いられたのは『萬葉集』が最初である。『萬葉集』には「夢」の語が詠まれている歌が98首あって、これは全体の約2.2%に相当する¹⁾。夢は「ユメ」ではなく「イメ」と訓み、「夢」（80）「伊米」（16）「伊目」（1）「伊味」（1）などと表記されている。98首の中には実際に見る夢ではなくて、「夢のごと」と比喩として用いられた夢が3首、「夢にも」や「夢かと」「夢かも」などと副詞として用いられた夢が3首含まれている²⁾。

98首を巻別に見ると、巻4（21首）、巻11（19首）、巻12（25首）に集中しており、

* 鮮文大 副教授 日本古典文学

1) 題詞や左注などにも「夢」の語が8例見えるが、含めなかった。

なお2.2%という比率は、『新古今』（3.9%）、『古今』（3.1%）、『千載』（3.1%）、『後撰』（2.6%）よりは低く、『詞花』（1.2%）、『後拾遺』（1.4%）、『金葉』（1.6%）、『拾遺』（1.6%）よりは高い。今井正「古代和歌における戀と夢」（『宇部國文研究』11、宇部短大、1980.3）参照。

2) 他にも「夢のわた」という奈良縣吉野郡の地名が2首（3-335、7-1132）で詠まれているが、ここでは含まない。

これら3巻で全体の66%をも占めている。部立別に見ると、相聞が72首、挽歌が5首、雑歌が7首であるが、部立が明示されていない巻15以後の歌にも内容から相聞と見なされるものが多く³⁾、夢は相聞の代表的な歌材として用いられたのである。また時代別に見ると、作者が判明している41首のうち、奈良時代以前（第一・二期）の歌は3首（2-150・2-175・4-490）しかないけれど、奈良時代前期（第三期）の歌が8首（4-621・4-710・9-1729・9-1809・15-3639・15-3647・15-3694・15-3714）、奈良時代中期（第四期）の歌が30首⁴⁾あり、夢が時代が進むにつれて詠まれていったことが分かる。なお巻11と巻12に多く見られる作者未詳歌が問題ではあるが、森脇氏の「天平期の著名歌人もしくは、その周辺の有名無名歌人」⁵⁾の作であるという説に従えば、これらは奈良時代前期から中期にかけての歌となる。98首のうち、作者が判明している歌は41首あって、大伴家持が16首、大伴坂上郎女が3首、笠女郎が2首、湯原王娘子が2首、中臣宅守が2首あり、特に家持とその周辺の人々に夢の歌が多い。一方、東歌（1首）や防人歌のような地方人の歌には夢は殆んど詠まれておらず、人麻呂歌集には夢の歌が10首あるが、全て略體歌である。

現代語の「夢を見る」という表現は、『萬葉集』では「夢に見ゆ」という形で詠まれており⁶⁾、大久保氏はこれを「夢の対象を主語とする単純な構文をとるもので、夢を自然發生的な神秘靈妙なものとする觀念が反映していると思われる」⁷⁾と説明している。

本稿では『萬葉集』の夢の歌98首について、夢の神秘性・靈妙性に着眼して、「夢の逢い」では魂の遊離と夢との関係について、「夢の呪術」では夢を見るための様々な呪術や夢占について考察しようと思う。そして「はかなき夢」では、人々の夢に寄せる信頼が薄れていった事情を探ろうと思う。なおテキストは日本古典文學全集（小學館）を用いた。

3) 石上幸作氏は巻15以降の14首の夢の歌のうち、10首を相聞に分類している。「萬葉集の夢」

（『論輯』3、駒澤大學大學院國文學會、1975.3）pp.5~6。

4) 石上幸作氏は奈良時代以前を4人4首、奈良時代前期を6人9首、奈良時代中期を10人33首としている。（前掲論文、p.8）

5) 森脇一夫「萬葉集卷十一・十二作歌年代考——天平歌人の作とその類歌とに關連して——」（『日本文學研究資料叢書 萬葉集Ⅱ』有精堂、1970）p.100

森脇氏は、特に巻11・巻12に見られる夢の歌についても、萬葉末期の作者の歌であろうと述べている。（『萬葉の美意識』櫻楓社、1974、p.255）

なお石上氏は巻11・12の夢の歌を奈良時代以前の歌として分類しており（前掲論文、pp.9~14）、國本治雄氏は巻11・12は明日香・藤原から奈良前期までの歌であるとして、萬葉の初期と末期の各々の一時期に夢が相聞の流行語となったと述べている。（『日本文學』18-5、日本文學協會、1969.5）

6) 岡部政裕氏は、「イメニミュ」が60例、「イメニミル」が23例、その他が18例あるとして、「夢は、自分から見るとはなく、相手に主體があつて、その働きかけによって見る、というよりも、見える（相手の遊離魂が夢に入り込んでくる）と考えた」と説いている。「『夢に見ゆ』考」（『上代文學』38、上代文學會、1976.11）p.81。

7) 大久保廣行「夢」（『國文學』學燈社、1972.5）p.109。

2. 魂の逢い

萬葉の時代は「人目」や「人言」⁸⁾などのために、即ち他人の目や噂などといった社会的な制約のために、男女が自由に逢うことは叶わなかった。また「里遠み」や「國遠み」⁹⁾など、即ち遠く離れていても実際に逢うことが叶わなかった。これらの理由で逢いたくても逢えない男女は「現には逢ふよしもなし夢にだに間なく見え君戀に死ぬべし」(11-2544)と願っているように、現の逢瀬の代わりに誰からも妨げられることのない夢の中の逢瀬を願ったのである¹⁰⁾。この「夢にだに」という言葉には、戀死にしようとする作者が夢に託した切なる激情が表わされている。夢の歌のうちでは夢の逢瀬を願った歌が最も多く、「夢に～見えこそ」¹¹⁾という類型的表現が多く用いられている。「こそ」は他に對して希望する終助詞なので、「見えこそ」は相手に自分の夢に現れて欲しいと願っているわけである。

現代の心理學では、夢を外部からの刺激や身體内部の感覺、過去の體驗や記憶、願望や不安などによって起る心理現象と見なしているが¹²⁾、萬葉人は、夢を一種の靈的な現象と把握していたようである。例えば、家持は「我が戀ふる心はけだし夢に見えきや」(4-716)¹³⁾と、娘子を慕う自分の「心」が夢に見えなかったかと尋ねたり、「あしひきの山

8) 『萬葉集』には「人目」や「人言」を氣にする歌が200首近くもあるが、夢と共に詠まれている歌は次の3首だけである。

作者未詳「うつせみの人目繁くはぬばたまの夜の夢にを繼ぎて見えこそ」(12-3108)

人麻呂歌集「直に逢はずあるはうべなり夢にだになにしか人の言の繁けむ」(12-2848)

作者未詳「人の見て言咎めせぬ夢にだに止まず見えこそ我が戀止まむ」(12-2958)

9) 人麻呂歌集「里遠み戀ひうらぶれぬまそ鏡床の辺去らず夢に見えこそ」(11-2501)

作者未詳「國遠み直には逢はず夢にだに我に見えこそ逢はむ日までに」(12-3142)

10) 他にも

大伴旅人「現には逢よしもなしぬばたまの夜の夢にを繼ぎて見えこそ」(5-807)

人麻呂歌集「現には直には逢はず夢にだに逢ふと見えこそ我が戀ふらくに」(12-2850)

作者未詳「現には言も絶えたり夢にだに繼ぎて見えこそ直に逢ふまでに」(12-2959)

作者未詳「～現には君には逢はず夢にだに逢ふと見えこそ天の足り夜を」(13-3280)

などの歌がある。

なお『萬葉集』には「現」という語が16首の中で詠まれているが、そのうち15首が「夢」の語と共に詠まれている。

11) 「我が背子は相思はずともしきたへの君が枕は夢に見えこそ」(4-615)などのように、「夢に見えこそ」と繋がっている歌が8首、「夢に」と「見えこそ」の間に他の語が挟まっている歌が9首ある。特に人麻呂歌集は10首のうち7首が夢の逢瀬を願った歌であり、そのうち3首で「見えこそ」という表現が使われている。

12) 宮城音彌『夢』岩波書店、1972。

13) 窪田空徳氏は「夢は此方の魂の先方の魂に感應するところから見るものだといふ信仰の上に立つての訴である」としている。(『萬葉集評釋』3、東京堂出版、1984、p.278)

きへなりて遠けども心し行けば夢に見えけり」(17-3981)と、「心」が通ったので夢に見えたと言っている。また作者未詳歌に「心をそ使ひに遣りし夢に見えきや」(12-2874) 14)と、自分の「心」を使い遣ったので夢に見えたかと相手に尋ねる歌もある。これらの歌に詠まれた「心」は「魂」に置き換えることができよう。

また作者未詳歌に「今よりは戀ふとも妹に逢はめやも床の辺去らず夢に見えこそ」(12-2957)とあり、在京某人の歌に「直に逢はずあらくも多しきたへの枕去らず夢にし見えむ」(5-809)とあるが、「床の辺去らず」や「枕去らず」は魂が寢床や枕に留まって去らないことを意味しているのである¹⁵⁾。前者は、魂だけでも自分のもとを離れずにいて夢に現れて欲しいと男が女に訴える歌であり、後者は、自分の魂は相手のもとを離れずにいて夢に現れることを約束する歌である。

更に作者未詳歌に「人の見て言咎めせぬ夢に我今夜至らむやどさすなゆめ」(12-2912)と、夢で逢いに行くから戸締まりをしないようにと相手に訴える歌があり、家持の歌に「夕さらば屋戸開け設けて我待たむ夢に相見に來むといふ人を」(4-744)と、戸を開けておいて夢で逢いに來る人を待つという歌がある。2首とも『遊仙窟』の「今宵戸ヲ閉スコトナカレ、夢裏渠ガ辺ニ向カハム」を踏まえた歌であるが、作者未詳歌を意識した家持が、その答歌として詠んだものと思われる。當時は戀人の訪れを戸を開けて待つという習俗があったが、その習俗を夢の世界にまで取り入れたのである。また作者未詳歌に、男が「門立てて戸もさしたるをいづくゆか妹が入り來て夢に見えつる」(12-3117)と詠むと、女が「門立てて戸はさしたれど盜人の掘れる穴より入りて見えけむ」(12-3118)と詠み返すという遊戯的な問答歌もある。夢に見えるのは相手の魂が家に入り込むからと信じていたらしい。

このように萬葉人は「睡眠中に展開しているおのれの夢の世界へ相手の情人の魂が訪れて來る」¹⁶⁾、即ち遊離した魂が所謂「夢の通ひ路」や「夢路」¹⁷⁾を通して訪れて來るものと信じていたのである。夢は戀人たちの魂を結ぶ回路としての機能を果たしていたのである。

現實に逢えない男女は夢の中での逢瀬を願ったのであるが、それは「筑波嶺のをてもこのに守部すゑ母い守れども魂そ合ひにける」(14-3393)とあるように、魂の逢瀬は誰

14) 土屋文明氏は「ココロには素朴な遊離魂の見方も存したのであろうか」としている。(『萬葉集私注』6、筑摩書房、1977、p.314)

15) 他にも、人麻呂歌集「里遠み戀ひうらぶれぬまそ鏡床の辺去らず夢に見えこそ」(11-250)がある。

16) 大久間喜一郎「戀と夢」(『解釋と鑑賞』至文堂、1971.10 p.80。

17) 『古今集』には

藤原敏行「住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ」(戀2-559)

小野小町「夢路には足もやすめず通へどもうつに一目見しごとはあらず」(戀3-658)

など、魂の通ひ路を表わす語が見えるが、『萬葉集』には見られない。

にも妨害されなかったからであり 18)、かつ「我が背子が袖返す夜の夢ならしまことも君に逢ひたるごとし」(11-2813)とあるように、夢の逢瀬から現の逢瀬と同じ程の充足感が得られたからである。また「魂合へば相寝るものを小山田の鹿猪田守のごと母し守らすも」(12-3000)という歌からも分かるように、當時は魂が逢えばいつかは現にも逢えると信じられていたようなので¹⁹⁾、現の逢いに對する期待心から夢見を願ったのかも知れない。

いくら夢見を願っても、無條件に夢を見ることができたわけではなく、折口氏が「魂」は「熟睡したり、考へごとに屈托した時には、衰へた肉體から、暫時、遊離して對象物の方に行くものと思はれてゐた」²⁰⁾と述べているように、「考へごとに屈托」することが必要であった。「戀慕の情」も、「考へごとに屈托」することの一つであると言えよう。『萬葉集』では、夢と「戀慕の情」との関係を次の三つのパターンに分けることができる²¹⁾。

第一に、相手が思っているから相手が自分の夢に現れるというパターンである。例えば、吹茨刀自の歌「眞野の浦の淀の繼ぎ橋心ゆも思へや妹が夢にし見ゆる」(4-490)や、娘子が湯原王に贈った歌「我が背子がかく戀ふれこそぬばたまの夢に見えつつ寝ねえずけれ」(4-639)、旅中の夫の歌「みをつくし心盡くして思へかもここにももとな夢にし見ゆる」(12-3162)などがそうである。何れも作者は夢見の原因が自分に對する相手の戀慕にあると判断しており、夢は相手の思いを伝える機能を果たしている²²⁾。三つの中では歌の数が一番多いパターンである。

第二に、自分が思っているから相手が自分の夢に現れるというパターンである。東人の妻が夫に贈った歌「間なく戀ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にし見ゆる」(4-621)や、作者未詳歌「朝柏潤八川辺の篠の目の偲ひて寝れば夢に見えけり」(11-2754)、中臣宅守の歌「思ひつつ寝ればかもとなぬばたまの一夜も落ちず夢にし見ゆる」(15-3738)などがそうである。作者は夢見の原因が相手に對する自身の思いにあると判断しており、これは現代人の一般的な判断とも一致している²³⁾。

18) 大久間喜一郎氏は「魂そ合ひ」が夢の逢いを指していると説いている。(前掲論文、p.79)
ただ人麻呂歌集には「夢にだになにしか人の言の繁けむ」(12-2848)と、夢の中でさえも人の噂によって戀を邪魔されるという意の歌がある。

19) 新潮日本古典集成には「當時の諺を踏まえたものか」とあり、講談社文庫(中西進譯注)には「魂の結合によって離れた二人の共寝が可能と考えた」とある。

20) 『折口信夫全集』中央公論社、1966、6巻 p.198。

例えば『源氏物語』には「もの思ふ人の魂はあくがなるものなれば、夢も騒がしきならむかし」(浮舟)と、物思いに耽ると魂が遊離して夢に現れるとある。

21) 菊川恵三氏は第一と第三を「夢の俗信」、第二を「自分ゆえの夢」に分類し、「夢の俗信」は相互交流的、「自分ゆえの夢」は内部沈潛的であると説いている。「天平相聞歌の表現と展開——夢とその俗信をめぐる——」(『萬葉史を問う』新典社、1999)

22) 若倭部身麻呂「我が妻はいたく戀ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず」(20-4322)の歌から分かるように、「影」(幻影)からも相手の思いを確認したようである。

第三に、自分が思っているから自分が相手の夢に現れるというパターンである。作者未詳歌「我妹子に戀ひてすべなみ白たへの袖返ししは夢に見えきや」（11-2812）や、人麻呂歌集「ぬばたまのその夢にだに見え繼げや袖ふる日なく我は戀ふるを」（12-2849）、作者未詳歌「すべもなき片戀をすところの我が死ぬべきは夢に見えきや」（12-3111）などが該当するが、自分では相手が夢を見たかどうかは判らない。

三つのパターンを魂の遊離という観点から見れば、戀慕する側の魂が遊離するわけだから、第一は相手の魂が遊離したもの、第二と第三は自分の魂が遊離したものということになろう。第一は相手が自分を思ってくれていることの證なので、夢を見れば嬉しいけれど、逆に長い間夢を見ないと、家持の歌「夢にだに見えばこそあれかくばかり見えずしあるは戀ひて死ねとか」（4-749）や、「夢にだに見えむと我はほどけども相し思はねばうべ見えざらむ」（4-772）のように、自分を少しも思っていないとして相手を恨むようになる²⁴⁾。これら2首では、家持は夢にも現れない坂上大嬢の薄情を恨んでいるのである。

第一と第二の夢を総合すると、遊離した魂が相手の夢に現れるばかりではなく、魂が遊離した本人までも夢を見ているとも解釋できよう²⁵⁾。即ち、雙方が同時に夢を見ているわけであるが、お互いに夢を見合ったという例は問答歌にも見られない。但し、忌部首黒麻呂が夢の中で作った歌「あらし田の鹿猪田の稻を倉に上げてあなひねひねし我が戀ふらくは」（16-3848）の左注には、夢の中で歌を作って友に贈り、目を覺してから友に誦詠させたら、全く同じ歌を誦詠したとある。この友も忌部首黒麻呂が歌を作るのを夢に見たのかも知れない。第三の夢は第一の夢の裏返しであるが、自分が相手の夢に現れたかどうかは自分では分からないので、「夢に見えきや」²⁶⁾などと、相手に夢を見たかどうか尋ねるようになる。

このように萬葉の後期において夢は相聞の歌語として頻りに用いられたが、萬葉の前期

23) 韓圭憲氏は、第二の夢の發想が『文選』や『玉臺新詠』などの中國文學の手法に倣って生まれたものと説いている。「萬葉集の『夢』の歌の考察——發想類型をめぐって——」（『國語國文研究』104、北海道大學、1996.11）

24) 相手を恨む歌は、他にも

作者未詳「相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えずうけひて寝れど」（11-2589）

作者未詳「我が戀は慰めかねつま日長く夢に見えずて年の經ぬれば」（11-2814）

作者未詳「ま日長く夢にも見えず絶えぬとも我が片戀は止む時もあらじ」（11-2815）

などがある。

25) 『源氏物語』（葵）では六條御息所の魂が遊離して葵の上に亂暴するが、そのことを六條御息所自身が夢に見ている。

26) 大伴家持「夜晝といふわき知らず我が戀ふる心はけだし夢に見えきや」（4-716）

作者未詳「我妹子に戀ひてすべなみ白たへの袖返ししは夢に見えきや」（11-2812）

作者未詳「確かなる使ひをなみと心をそ使ひに遣りし夢に見えきや」（12-2874）

作者未詳「すべもなき片戀をすところの我が死ぬべきは夢に見えきや」（12-3111）

などの歌がある。

においては僅かに挽歌の中で詠まれている。挽歌の夢は5首あるが²⁷⁾、そのうち2首は實際の夢ではなく副詞的に比喻として用いられた歌である。一つは作者未詳の長歌で「～宮の舍人も たへのほゆ 麻衣着れば 夢かも現かもと 曇り夜の 迷へる間に ～」（13-3324）とあり、ある皇子の薨去を嘆く舍人の心情が夢に喩えられている。もう一つは遣新羅使である六鰭の長歌で「～ 夢のごと 道の空路に 別れする君」（15-3694）とあり、同僚との突然の死別を嘆く心情が夢に喩えられている。

他にも、天武天皇が崩御して8年後に行われた御齋會の夜に持統天皇が詠んだ長歌の題詞に「夢の裏に習ひ賜ふ御歌一首」（2-162）とあり、持統天皇は夢の中で歌を習い詠んだのである²⁸⁾。また未定訓ではあるが、十市皇女が薨去した時に高市皇子が詠んだ挽歌に「夢にだに見むとすれども（已具耳矣自得見監乍共）寝ねぬ夜ぞ多き」（2-156）とも訓める歌もある。それに部立は明示されていないが「死にし妻を悲傷ぶる歌」と題する「現にと思ひてしかも夢のみに手本まき寝と見ればすべなし」（19-4237）という歌では、夢で亡き妻と手枕を交わす夫の切なさが詠まれている。

以下、5首の挽歌の夢のうち、先に見た2首の比喻の夢を除いた3首を、巻の順に見ていくことにする。一番目は第一期の歌、二番目は第二期の歌であり、また三番目は第三期の歌ではあるけれど、作者が実際に見た夢ではなくて傳説を素材にしたものである。先ず、亡き天智天皇が現れた夢で、これは『萬葉集』に初めて登場する夢である。

うつせみし 神に堪へねば 離れ居て 朝嘆く君 離り居て 我が戀ふる君 玉ならば 手に巻き
持ちて衣ならば 脱く時もなく 我が戀ふる 君そ昨夜 夢に見えつる（2-150）

天智天皇が崩御した時、ある後宮の婦人の夢に天智天皇が現れた。相聞の夢か何れも生者の魂が遊離したものであったのに對し、ここでは天智天皇の死霊が現れた。この歌の前に皇后である倭大后が天智天皇に奉った3首が配置されているが、倭大后は「目には見れどもただに逢はぬかも」（2-148）とか、「影に見えつつ忘らえぬかも」（2-149）とかと詠んでいる。倭大后が見たという「影」は、婦人が夢に見たものと同じく、天智天皇の死霊だったのであろう²⁹⁾。

相聞では「人目」や「人言」などの社會的な制約のために逢えなかったが、この歌でも「うつせみし 神に堪へねば 離れ居て」とあるように、現世の人である婦人は神となった天皇に逢いたくても逢えない立場にある。また夢見の必要條件が戀慕の情であったよう

27) 卷15の3694番歌は部立が明示されていないが、内容は挽歌に相當する。

28) 伊藤博氏は、この夢を「魂鎮めのための夢占い」とであると説明している。（『萬葉集の表現と方法 上』塙書房、1975、p.282）

29) 青木生子氏は、古代的心靈の世界に生きた倭大后が見たものは婦人の見た夢と等質な世界に屬すると説いている。（『萬葉挽歌論』塙書房、1984、p.315）

に、この歌でも婦人は「朝嘆く君」とか「我が戀ふる君」とかと、何度も亡き天皇を偲んでいる。婦人は相聞のように、逢いたくても逢えない人を戀い慕った結果、夢を見たのである。但し、相聞では思った側の魂が遊離しているけれど、ここでは思った側である婦人の魂が遊離したというよりは、婦人の思いが天皇の靈を自分の夢の世界へ招き寄せたと見るべきであろう³⁰⁾。

次に、草壁皇子が崩御した際、舍人たちが皇子の死を哀傷して詠んだ歌が23首あるが、その中の1首に「夢」の語が見える。

夢にだに見ざりしものをおほほしく宮出もするか佐日の隈廻を (2-175)

ある舍人が草壁皇子の陵墓に出仕した際の心情を詠んだ歌である。「夢にだに見ざりしものを」を、夢にも思わなかったと解釋すれば、夢は副詞として用いられたことになり、夢にも見なかったと解釋すれば、睡眠中に見る夢となるが、ここでは後者として解釋したい。直前の174番歌は「外に見し眞弓の岡も君ませば常つ御門と侍宿するかも」という歌で、「君ませば」、即ち亡き草壁皇子の靈が宿る陵墓にて宿直する舍人の哀傷が詠まれている。そして次の175番歌でも同じく陵墓に宿直する舍人の嘆きが詠まれている。舍人は、皇子の靈は陵墓に宿っているのに夢に現れることもなく、心が晴れ晴れしないまま宿直を続けなければならない境遇を悲嘆しているのである³¹⁾。

三番目は、所謂「生田川傳説」³²⁾を扱った歌で、千沼壯士と菟原壯士の両者から求婚された菟原處女が自殺し、千沼壯士の夢に現れて自身の死を知らせるや、二人の男たちも後を追って自殺するという話である。この傳説は高橋蟲麻呂の歌 (9-1809～1811) の他にも、田辺福麻呂 (9-1801～1803) と家持 (10-4211・4212) の歌もあるが、夢は高橋蟲麻呂の長歌だけで詠まれている。

～ 黄泉に待たむと 隠り沼の 下延へ置きて うち嘆き 妹が去ぬれば 千沼壯士 その夜夢に見 取り 續き 追ひ行きければ ～ (9-1809)
墓の上の木の枝なびけり聞きしごと千沼壯士にし依りにけらしも (9-1811)

30) 伊藤博氏も、婦人が遊離の状態にあった天皇の靈を呼び求めて見た夢ではなかったかと説明している。(前掲書、p.281)

31) 青木生子氏は「その皇子が夜の侍宿の夢の中にもあらわれない(存在しない)のに、頼りないぼうつとした状態で殯宮に出仕するといった嘆きを、これは歌ったのであろう」としている。(前掲書、p.319)

32) 生田川傳説は後に『大和物語』147段や、謡曲『求塚』の題材になり、森鷗外は戯曲『生田川』を創作した。

菟原處女は夢を通じて千沼壯士だけに自分の死を知らせており、反歌にも「千沼壯士にし依りにけらしも」とあるように、菟原處女は千沼壯士の方をより愛していたのである。長歌の夢は菟原處女が「黄泉に待たむ」とした相手が血沼壯士だったことを暗示する機能を果たしていると言えよう。

最後に、雑歌の夢について少し觸れてみることにする。雑歌には7首の夢の歌があるが、その中には「現には逢ふよしもなしぬばたまの夜の夢にを繼ぎて見えこそ」（5-807）や「直に逢はずあらくも多くしきたへの枕去らずて夢にし見えむ」（5-809）、「曉の夢に見えつつ梶島の磯越す波のしきてし思ほゆ」（9-1729）などのように、多分に相聞的な夢の歌も見られる。その反面、人ではなく自然物が夢に現れるのは2首の雑歌だけである³³⁾。

一つは、天平2年（730）に大伴旅人邸で梅花の宴が催されて梅花の歌32首が詠まれたが、これに追和した旅人の歌である。「梅の花夢に語らくみやびたる花を我と思ふ酒に浮かべこそ」（5-852）という歌で、夢に現れた梅の花が自分を酒に浮かべるように指示したのである。この歌のように夢に現れて何かを告げるといふ、所謂「夢告」の歌は、夢の中に琴が娘と化して現れて生い立ちを語るといふ旅人の書簡（5-810・811）や、鷹が戻ることを娘子が夢で告げるといふ家持の歌や題詞（17-4011・4013・4015）などにも見られる。これらは『記紀』などに見られる神からの夢託の流れを受け継ぐものと思われ、「～ 新た夜の 幸く通はむ 事計り 夢に見えこそ ～」（13-3227）と、夜離れせずに逢える方法を神に夢で教えてくれるように請う雑歌もある。

もう一つは、作者未詳の羈旅作「荒磯ゆもまして思へや玉の浦離れ小島の夢にし見ゆる」（7-1202）で、玉の浦の離れ小島が見えた夢である。「まして思へや」とあるように、自分が対象を思うから夢に現れたのである。

3. 夢の呪術

前述したように、人目や人言などの社会的な制約のために現に逢えない戀人たちは夢の逢瀬を願って、例えば、夢を見ようとわざと戸を開けておいて寝たりしたが、もっと積極的な方法も用いた。夢を見ることは自分の意志ではどうにもならないことなので、神に祈願したり、呪術的な習俗に頼ったりしたのである³⁴⁾。神に祈願するものとしては「うけひ

33) 他にも、譬喩歌「常ならぬ人國山の秋津野のかきつはたをし夢に見しかも」（7-1345）があるが、この「かきつはた」は旅先で見た女を比喻したものと思われる。

34) 『廣辭苑』では「呪術」を「超自然的存在や神秘的な力に働きかけて種々の目的を達成しよう

」と「手向」があり、呪術的な習俗としては「袖反」と「下紐解く」、「枕片去る」がある³⁵⁾。夢は遊離魂の現象と考えられていたから、これらは相手の魂を自分の夢に招き寄せるための祈願であり呪術であると言えよう。夢の呪術を多く詠んだのは家持で、16首のうち3首詠み、また人麻呂歌集の10首のうち3首が夢の呪術の歌である。

先ず、夢見を神に祈願する「うけひ」から見てみることにする。「うけひ」とは、神に誓約してから行動し、その結果から善悪・成否・吉凶などの神意を伺おうとする呪術のことである。夢に關する「うけひ」だから、夢を見たら相手が自分を思っていてくれる、夢を見なかったら自分を思っていないと心に決めてから寝て、その結果によって相手の心を判断したものと思われる。『萬葉集』では「うけひ」が詠まれた歌が全部で4首あるが³⁶⁾、そのうち3首が夢の歌である。

都路を遠みか妹がこのころは祈ひて寝れど夢に見え來ぬ (4-767)

水の上に數書くごとき我が命妹に逢はむとうけひつるかも (11-2433)

さね葛後も逢はむと夢のみにうけひ渡りて年は經につつ (11-2479)

相思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えずうけひて寝れど (11-2589)

夢の逢瀬を祈った歌が3首、現の逢瀬を祈った歌が1首であるが、何れも特定の神を對象とした「うけひ」ではない。夢の歌は何れも「うけひ」をして寝たけれども夢を見ることができず、相手の薄情を恨むという内容である。1番目は恭仁京にいる家持が奈良の坂上大嬢に贈った歌で、夢に見えない理由を「都路を遠みか」と、距離が遠いからだと推測している。元々遠く離れた戀人たちを結び付けてくれるのが夢であり、家持の推測は單なる言い譯に過ぎない。3番目は人麻呂歌集で、作者は「うけひ」しても夢に逢えないまま年月が過ぎてゆくことを嘆いている。4番目は作者未詳歌で、夢に見えない理由を「相思はず君はあるらし」と、相手が自分を思っていないからだと判断している。片方だけでも相手を強く思えば夢を見ることができると信じられていたから、この理由も言い譯に過ぎない。

次に「手向」であるが、「手向」は旅の安全を祈って神に幣や飲食物などを供える儀禮のことである³⁷⁾。『萬葉集』には「手向」に關する歌が全部で14首（「手向」9、「

とする意圖的な行爲」であると説明している。

35) 三塚貴氏は「ま袖もち床打ち拂ひ」(13-3280)、即ち兩袖で寢床の塵を拂うことも夢見の呪術と見なしているが、どうだろうか。「『萬葉集』における「夢」による問答」(『新大國語』11、新潟大學、1985.2) p.34。

36) 八代集には「うけひ」は見られず、ただ『拾遺集』(10-595)に承諾するという意で「うけひく」とある。

37) 大久間喜一郎氏は『倭名抄』を引用しながら、惡靈を驅逐する道祖神の和名が「タムケノカミ」であったと説いている。(『古代文學の構想』武藏野書院、1971) pp.128～131。

手向くさ」3、「手向の山」2）あるが、旅の安全を祈る歌のほか、「手向」を夢を見るための呪術として詠んだ歌が3首ある³⁸⁾。

いかならむ名に負ふ神に手向せば我が思ふ妹を夢にだに見む（11-2418）
 我妹子を夢に見え來と大和道の渡り瀬ごとに手向そ我がする（12-3128）
 ～手向すと～三諸の神の～石枕 苔生すまでに 新た夜の 幸く通はむ 事計り 夢に見えこそ～（13-3227）

1・2番目は人麻呂歌集で、前の歌は、どの神に手向をしたら戀人に夢で逢えるかという意であり、後の歌は、旅にある男が妻との夢の逢いを願って大和道の渡り瀬ごとの神に手向するという意である。2首の作者は、戀人と夢の逢瀬ができるよう手向の神に祈願しているのである。3番目は作者未詳の長歌で、夜離れをせず戀人に逢える方法を夢で教えて下さるようにと三諸の神に頼んでいる。作者は夢告を求めて三諸の神に手向をしたのである。「うけひ」は特定の神を対象としていなかったが、「手向」は大和道の神や三諸の神に對して行っているように、祈る神を決めてしたようである。1番目の歌の作者が、どの神に手向をしたらいいのかと迷ったのも、そのためであろう。

ところで『記紀』や『風土記』には、神から夢託を授かるために特別な行爲を行ったことが記述されている。例えば崇神天皇は「爾に天皇愁へ歎きたまひて、神牀に座しし夜、大物主大神、御夢に顯れて 曰りたまはく ～」（崇神記）と、神牀という夢を見るための床で夢を求めたり、「天皇、乃ち沐浴齋戒し、殿内を潔淨めて祈みて曰はく ～ 冀はくは亦夢裏に教へて ～」（崇神紀7年）と、沐浴齋戒して神の夢託を求めたりしている。また大神大穴持の命は「大神夢願給、『告御子之哭由』、夢亦願座～」(出雲國風土記 仁多郡)と、御子が哭くわけを夢で教えてくれるようにと祈った。このように『記紀』や『風土記』に見られる夢は「たんなる自然發生的な夢ではなく、一定の祭式的な手続きによって得られた夢なのであり、だからこそそれは公的に信すべきもの」³⁹⁾だったのである。『萬葉集』には神が直接夢に現れたという歌は無いけれど、「うけひ」や「手向」で神に祈願したのは、夢は神から授かる神聖なものという認識があったからであり、それは『記紀』に見られる夢の神託と相通ずるものであると言えよう。

第三に、呪術的な習俗である「袖反」について見てみることにする。「袖反」とは袖を折り返して寝ることによって夢を見ようとする呪術のことで、全部で4首ある⁴⁰⁾。

38) 八代集には「手向」が14首（『古今集』2、『後撰集』4、『拾遺集』1、『後拾遺』2、『金葉』1、『千載集』3、『新古今』1）で詠まれているが、旅の安全を祈ることから轉じて、旅立つ人に餞別を贈る意味としても使われている。

39) 西郷信綱『古代人と夢』平凡社、1972、p.20。

40) 八代集にも、『古今集』（戀2-554）、『後拾遺集』（戀4-782）、『新古今集』（秋下-499）と3首あるが、ただ裏返すのは「袖」ではなく「衣」である。

我妹子に戀ひてすべなみ白たへの袖返ししは夢に見えきや (11-2812)
我が背子が袖返す夜の夢ならしまことも君に逢ひたるごとし (11-2813)
白たへの袖折り返し戀ふればか妹が姿の夢にし見ゆる (12-2937)
～ 袖返しつつ 寝る夜落ちず 夢には見れど 現にし 直にあらねば 戀しけく ～ (17-3978)

1・2 番目は作者未詳の問答歌である。袖を返して寝た男が夢に自分が現れたかどうかを女に問うや、女は現に男に逢っているような感覚の夢を見たと言ったのである。3 番目も作者未詳歌で、袖を返して寝た男が戀人を夢に見て喜ぶという歌である。4 番目は家持の長歌で、袖返しをして毎晩のように戀人に夢で逢うけれども、現の逢瀬ではないので何か物足りないという意である。「袖反」には、1・2 番目のように袖を返した人が相手の夢に現れる場合と、3・4 番目のように袖を返した人の夢に相手が見える場合の両方があったようである。前者は、自分が思っているから自分が相手の夢に現れるというパターン、後者は、自分が思っているから相手が自分の夢に現れるというパターンに該当すると言えよう。袖を返した3人は何れも男で、夢を見ることができなかった「うけひ」とは異なり、何れも願いが叶っている。

第四に「下紐解く」である。「下紐解く」とは、くしゃみをしたり、眉がかゆくなったり、下紐が解けたりすることが戀人に逢える前兆と信じられていたが⁴¹⁾、この前兆を逆に取って、夢で逢うために自分から下紐を解いて寝る行為である。家持の歌が1首だけある⁴²⁾。

夢にだに見えむと我は ほどけども 相し思はねばうべ見えざらむ (4-772)

夢を見ようと下紐を解いて寝たが、相手が思ってくれていないから夢に現れないという意である。「うけひ」では、相手が夢に現れない理由を距離のせいにした家持だったが、ここでは「相し思はねばうべ見えざらむ」と、相手が自分を思ってくれていないからだとして判断している。「うけひ」の夢の歌にも「相思はず君はあるらし」と、類似した表現が使われていたが、片方だけでも強く思えば夢を見ることができたわけだから、家持の單なる言い譯に過ぎない。

最後に「枕片去る」である。「枕片去る」とは、夢を見ようとして枕の片方を相手の爲にあけて寝ることで、1首だけある⁴³⁾。

41) 眉根掻き鼻ひ紐解け待つらむかいつかも見むと思へる我を (11-2408)

42) 八代集には「下紐」を詠んだ歌が12首あるが、夢を見るためにわざと紐を解いたという歌はない。

43) 八代集には「枕片去る」は詠まれているが、枕と夢は関係が深かったようで、枕の方向によって夢が見られるという俗信の歌が『古今集』(戀1-516)と『後撰集』(戀3-739)に1首ずつ

ここだくに思ひけめかもしきたへの枕片去る夢に見え來し (4-633)

これは湯原王から贈られた歌に對して、娘が答えた歌である。枕を方寄せて寢た夜の夢に湯原王が現れるや、娘は「ここだくに思ひけめかも」と、湯原王が思ってくれているから夢を見ることができたと詠み返したのである。當時、戀人が横にいらなくても、いる時と同様に寢床の片方を空けておく風習があったが、それは夢を見るための呪術であると思われる。よってこの夢は、湯原王の娘への戀慕と、娘子の「枕方去る」という呪術との相乗効果によって得られた夢と言えよう。

このように萬葉人は様々な呪術を使って積極的に夢を求めたのであるが、それは現の逢いの代わりとして夢の逢いを願ったばかりではなく、「魂合へば相寝るものを小山田の鹿猪田守のごと母し守らすも」(12-3000) 44)とあるように、魂の逢瀬をすれば実際にも逢えるようになると信じられていたらしいので、夢見後の現の逢いを期待していたからかも知れない。

ところで、このような夢を見るための呪術のほかにも、「夢占」という呪術的な行為もある。何か行動を決定しようとする際にしばしば占いに頼った萬葉人であったが、占いには色々な方法があった。例えば官僚の占いとして、神祇官の卜部45)が用いた「龜卜の法」や、陰陽師46)が用いた「占筮の法」があり、俗占として、「夕占」・「足占」・「水占」・「石占」などがあり、「夢占」も俗占に含むことができよう。夢占は單に人が現れたという夢ではなく、具體的な内容を持った夢を見た場合、その夢の意味を解釋しようとしたのである47)。特に夢を通じて自己の將來の運命を占おうとしたのであり、『萬葉集』にはそのような夢占の歌が3首ある。

我が思ひを人に知るれや玉くしげ開き明けつと夢にし見ゆる (4-591)

劍大刀身に取り副ふと夢に見つ何の兆そも君に逢はむため (4-604)

摺り衣着りと夢に見つ現にはいづれの人の言か繁けむ (11-2621)

1 番目は笠女郎が家持に贈った24首の中の1首で、笠女郎は「玉くしげ」が開けられる

ある。

44) 新潮日本古典集成の頭注には「當時の諺を踏まえたものか」とある。

45) 龜卜の法は大陸から傳わったもので、卜部の定員は「職員令」によると20人だった。(日本思想大系3『律令』岩波書店、1976、p.511)

46) 例えば『今昔物語集』(24-14)には陰陽師の弓削是雄が夢解きしたことが記録されている。また『二中歴』(13 一能歴)には「夢解 世兒 世千成 院讀 都々 横頭」と、5人の夢解きの名が挙げられている。(改定史籍集覽23『二中歴』近藤出版部、1901、p.237)

47) 眞下厚氏は「夢に見ゆ(る)」と歌に詠む行為自体が、夢を解こうとし、現實との符合を確認しようとする行為であると説いている。「『夢に見ゆ(る)』とうたうことは」(『古代文學』31、武蔵野書院、1992.3)

夢を見るや、もしや二人の關係が露見するのではないかと不安に思った⁴⁸⁾。笠女郎は家持との戀が露見して、二人の仲が破綻しはしないかと不安がったのである。箱が開けられる夢を秘密の露見の象徴であると解釋したのは、極めて常識的な夢解きであると言えよう。

2 番目も笠女郎が家持に贈った歌である。笠女郎は「劔大刀」を身に付けるといふ夢を見るや、それは戀する家持に現實に逢える前兆であろうと喜んだ。「劔大刀」は男性の所持品であり、それを身に添えるという夢であるから、笠女郎が家持との逢瀬の前兆であろうと夢解きしたのも納得がいく。なお契沖の『萬葉代匠記』は『古今和歌六帖』の「うちなびき獨りし寝ればます鏡取ると夢見つ妹に逢はむかも」(5-2702)を引用しているが、これは男である作者が女性の所持品である鏡を手にする夢を見て、それは戀人に逢える前兆だろうと解釋した歌である。

3 番目は作者未詳歌で、作者は摺り衣を着た夢を見るや、それは誰かとの戀の噂を立てられる前兆であろうと解釋した。「摺り衣」は植物の花や葉を生地に摺りつけて染めたもので、様々な模様が入った衣である。「摺る」は異性との接觸を象徴していると解釋できるし、また派手な模様が入った「摺り衣」はとても目立つものなので⁴⁹⁾、異性との噂を立てられるという作者の夢解きは現代心理學の夢分析のレベルに匹敵するものである。

このように3 首とも夢を見た本人が夢解きをしているが、何れも現代人から見ても納得できる解釋となっている。夢解きをした作者は、その結果から、不安に思ったり、喜んだり、期待を抱いたりしているが、そこから夢の神性を信じ、夢を氣にしながら生活した萬葉人の姿を垣間見ることができよう。

4. はかなき夢

現の逢いの代用として夢の逢いを求めた萬葉人であったが、憶良が旅人の妻の死を悼んだ漢詩文に「～ 四生の起滅は、夢の皆空しきが方く ～」(5-794)と、四生の生死の儚さを夢の儚さに喩えた如く、夢は結局のところ頼りなく空しいものである。よって『萬葉集』にも夢の儚さを詠んだ歌があり、それは萬葉末期の比較的新しい時代の歌に多い。全部で6 首あって、家持の歌が3 首、遊行女蒲生の歌が1 首、作者未詳歌が2 首あるが、これらは内容から次の三つに分けることができよう。

48) 新潮日本古典集成の頭注には「理由なく櫛笥をあけると二人の仲がこわれるという俗信があったか」とある。

49) 契沖は「摺衣は様々の紋を亂れ摺る物なれば、それを著たりと見たらむは、他言の多からむ相なるべし」(『萬葉代匠記』)と述べている。

先ずは、夢の逢いは叶ったけれど、それだけでは虚しいので現にも逢いたいと訴える歌で、2首ある。

現にも今も見てしか夢のみに手本まき寝と見れば苦しも (12-2880)
現にと思ひてしかも夢のみに手本まき寝と見ればすべなし (19-4237)

前は作者未詳歌で、夢の中で戀人と手枕しただけでは物足りないので、今すぐ現にも逢いたいと訴えた歌である。後は遊行女蒲生の歌で、夢の中で手枕するのは堪らないので、現にも傍にいたいと思いたいという意である。2首とも夢の逢いだけでは満足できない心情が詠まれている。

次に、夢の逢いは現の逢いではないので、戀しさが一層募るという歌で、2首ある。

～ 袖返しつ つ 寝る夜落ちず 夢には見れど 現にし 直にあらねば 戀しけく ～
(17-3978)
ぬばたまの夢にはもとな相見れど直にあらねば戀止まずけり (17-3980)

2首とも家持の歌で、前の長歌は、袖を返して寝たので毎晩の如く戀人を夢に見るが、現の逢いではないので戀しさが一層募るという意である。後は、夢の中では頻りに逢っているものの、現の逢いではないので戀しさは止らないという意である。「思はぬに妹が笑まひを夢に見て心の内に燃えつつそ居る」(4-718)と、娘子を夢に見て益々戀心を燃やした家持であったが、この2首では夢の中では毎晩の如く頻りに逢っているけれど、現ではないので一層戀しさが募ると嘆いている。「夢が現實に對置するものとして認知」⁵⁰⁾していた家持は、ここでは夢の逢瀬と現の逢瀬の違いを強調しているのである。

最後に、夢から覺めて手探りしても相手がいないから寂しいと詠んだ歌で、2首ある⁵¹⁾。

愛しと思ふ我妹を夢に見て起きて探るになきがさぶしさ (12-2914)
夢の逢ひは苦しかりけりおどろきて搔き探れども手にも觸れねば (4-741)

前は作者未詳歌で、戀人を夢に見た男が覺めてから戀人を探しても傍にいないことを寂しがる歌である。後は家持の歌で、前の歌を踏まえたものと思われる。夢から覺めた後、手探りしても手にも觸れなく、戀人の不在を悟った時の辛さが詠まれている。特に「起き

50) 石上幸作「萬葉集の夢(二)」(『論輯』4、駒澤大學大學院國文學會、1976.2) p.14。

51) 作者未詳の長歌の左注にも「～ 夢の裏に相見、覺き覺めて探り抱くに、かつて手に觸れることなし～」(16-3857)と、類似した表現が見える。

て探るになきがさふしさ」や「搔き探れども手にも觸れねば」が『遊仙窟』「少時ニシテ座睡スレバ、則チ夢ニ十娘ヲ見ル。驚キ覺メテ之ヲ攬レバ忽然ニシテ手ヲ空シクス。」を引用していることから、夢に對する冷めた意識は中國文學からの影響によって生じたものと考えられる。家持が『遊仙窟』に題材を求めたのは中國の先進文化に憧れを抱いていたからであり、「中國的教養を身につけた文人家持の精神には、すでに前代の人々よりも、あるいは同時代の誰よりも一歩進んだ合理觀が支配していた」⁵²⁾とも考えられる。

夢に信頼を寄せ、積極的に夢を求めた萬葉人だったけれど、次第に夢に對して覺めた意識を抱くようになり、夢の價值や必要性を感じなくなっていったようである。だが、そのような夢への冷めた意識は、後代の深養父の歌「うばたまの夢に何かはなぐさま現にだにも飽かぬ心を」（『古今集』物名-449）のように、夢に對する完全なる不信・否定の段階には到っていないと言えよう。

これまで見てきた夢は睡眠中に實際に見る夢であったが、憶良の漢詩文で「夢の皆空しが方く」と、生死の儚さが夢に喩えられていたように、比喩として用いられた夢の歌もある。例えば「夢のごと」という直喩の夢が3首ある。

夢のごと思ほゆるかもはしきやし君が使ひのまねく通へば（4-787）

夢のごと君を相見て天霧らし降り來る雪の消ぬべく思ほゆ（10-2342）

わたつみの 恐き道を 安けくも なく惱み來て 今だにも 喪なく行かむと 壹岐の海人の ほとつての占部を かた焼きて 行かむとするに 夢のごと 道の空路に 別れする君（15-3694）

1 番目は家持の歌で、「君が使ひのまねく通へば」、即ち娘が久須麻呂から熱心に求婚されていることを家持は夢のように歡喜した。「夢のごと」には、現實では起こりえないような出來事に接した際の家持の心情が表現されている。2 番目は作者未詳歌で、夢のように戀人に逢ってから自分は雪の如く消え入らんばかりに悲しく思われるという意である。「夢のごと」には、儚い逢瀬をした女の心情が表現されている。3 番目は遣新羅使である六鯖の長歌で、壹岐で突然亡くなった同僚を悼んで、「夢のごと 道の空路に 別れする君」と、夢のように旅路の空でお別れする君よと詠んだのである。3 首とも「夢のごと」という直喩であるが、1 番目は現實とは思えない歡喜の心情が喩えられており、2 番目と3 番目は目覺めたら消えてしまうという夢の屬性に基づいて、逢瀬や死別の儚さが喩えられているのである。

このような「夢のごと」という直喩のほかに、副詞的に使われている夢が3首あって、それぞれ作者の心情を表現している。

現にも 夢にも 我は思はずき古りたる君にここに逢はむとは（11-2601）

52) 大久間喜一郎、前掲論文、p.82。

夢かと心迷ひぬ月まねく離れにし君が言の通へば (12-2955)

～ 宮の舍人も たへのほゆ 麻衣着れば 夢かも現かもと 曇り夜の 迷へる間に ～
(13-3324)

1 番目は作者未詳歌で、昔なじみの男と再會した女が、ここで逢おうとは現にも夢にも思わなかったと詠んでいる。昔の戀人との再會に驚いている女の心情が「現にも夢にも我は思はずき」で強調されている。2 番目も作者未詳歌で、戀人から思いがけなく便りをもたらした作者が夢かと思って取り亂して詠んだ歌である。「夢かと心迷ひぬ」で、思いがけない出來事に驚喜した作者の心情が強調されている。3 番目も作者未詳の長歌で、ある皇子が薨去した時、真っ白な麻の喪服を着た舍人が、これは夢なのか現なのかと戸惑うという意である。舍人は果たして夢なのか現なのか判断できない程、皇子の死を嘆き悲しんでいるのである。

夢を一つの現實として信賴した古代人であったが、比喩や副詞的に使われた夢は、夢は幻影であり、儚いものであるという觀點から、或いは夢は不可思議で、非現實的なものであるという觀點から使われている。即ち、夢は現實とは思われない出來事や、そのような出來事に出會った時の心情を表現しているのである。

5. おわりに

以上『萬葉集』に詠まれた98首の夢を考察した。同じ『萬葉集』の中でも、詠まれた時期や作者、部立などによって、夢の捉え方にかかなりの違いが見られた。夢の歌は婦人の夢に亡き天智天皇が現れた挽歌を嚆矢として、その後、戀の世界のモチーフとして相聞に多く詠まれるようになっていった。様々な障害によって實際の逢瀬が叶わぬ戀人たちは、夢の逢瀬を願ったわけであるが、それは誰からも夢の逢瀬を妨害されなかったからであり、かつ夢の逢瀬に現の逢瀬と同じ程の充足感を覺えたからである。また夢の逢瀬後の現の逢瀬に對する期待心からかも知れない。

夢は一種の遊離魂の現象であって、相聞では生者の魂が、挽歌では死者の魂が夢に現れた。魂が遊離して夢を見るためには戀慕の情が必要であったが、自分と相手のうち、どちらが戀慕したかによって、遊離した相手の魂が自分の夢に現れる場合と、自分の魂が遊離して相手を訪れる場合に分かれた。

萬葉人は單に夢見を願っただけではなく、夢を見ようとして積極的な行動をとった。それは神に祈ったり、呪術的な習俗を利用する行爲で、前者には「うけひ」や「手向」が、後者には「袖反」や「下紐解く」「枕片去る」などがある。夢は遊離魂の現象だから

、これらは相手の魂を招き寄せるための呪術であり、その呪術によって得られた夢は『記紀』や『風土記』の夢を引き継いだ神聖な夢であると言えよう。また萬葉人は何か内容のある夢を見た場合は、夢解きを通じて自分の將來の運命を知ろうとした。

ところが夢は結局のところ夢であり、夢の逢瀬から覚めると反って寂しさが募るばかりである。呪術を通じて夢を求めた家持でさえも、夢の逢瀬だけでは寂しさを癒すことができなかったようで、夢の儚さを歌に詠んでいる。また夢が比喻や副詞的にも詠まれているが、それは夢の儚さを表現したものである。

本稿では『萬葉集』だけを考察したが、今後は「夢」という歌語が『古今集』を始めとする八代集にどのように繼承され、變遷していったのか調べてみたい。

K C I

【参考文献】

- ・ 日本古典文學大系『萬葉集』1~4、岩波書店、1957
- ・ 日本古典文學全集『萬葉集』1~4、小學館、1971
- ・ 新潮日本古典集成『萬葉集』1~5、新潮社、1976
- ・ 土屋文明『万葉集私注』1~10、筑摩書房、1976
- ・ 窪田空穂『萬葉集評解』1~12、東京堂出版、1984
- ・ 新編日本古典文學全集『萬葉集』1~4、小學館、1994
- ・ 新日本古典文學大系『萬葉集』1~4、岩波書店、1999
- ・ 土屋文明『万葉集年表』岩波書店、1980
- ・ 今村与志雄譯『遊仙窟』岩波書店、1990
- ・ 大久間喜一郎『古代文學の構想』武蔵野書院、1971、pp.123~144
- ・ 西郷信綱『古代人と夢』平凡社、1972、pp.9~31
- ・ 森脇一夫『万葉の美意識』櫻楓社、1974、pp.248~256
- ・ 伊藤博『万葉集の表現と方法 上』塙書房、1975、pp.273~290
- ・ 『折口信夫全集』6、中央公論社、1976
- ・ 青木生子『萬葉挽歌論』塙書房、1984、pp.312~329
- ・ 美夫君志會編『万葉史を問う』新典社、1999、pp.335~339
- ・ 河東仁『日本の夢信仰』玉川大學出版部、2002、pp.65~78
- ・ 緒方惟精「古代文學に描かれたる夢」（『千葉大學文理學部・文化科學紀要』7、千葉大學、1963）
- ・ 國本治雄「万葉集の夢——相聞歌の表現としての考察——」（『日本文學』日本文學協會、1969.5）
- ・ 森脇一夫「万葉集卷十一・十二作歌年代考——天平歌人の作とその類歌とに關連して——」（『日本文學研究資料叢書 万葉集Ⅱ』有精堂、1970）
- ・ 大久間喜一郎「戀と夢」（『解釋と鑑賞』至文堂、1971.10）
- ・ 大久保廣行「夢」（『國文學』學燈社、1972.5）
- ・ 石上幸作「万葉集の夢」（『論輯』3、駒澤大學大學院國文學會、1975.3）
- ・ 石上幸作「万葉集の夢（二）」（『論輯』4、駒澤大學大學院國文學會、1976.2）
- ・ 岡部政裕「『夢に見ゆ』考」（『上代文學』38、上代文學會、1976.11）
- ・ 今井正「古代和歌における戀と夢」（『宇部國文研究』11、宇部短大、1980.3）
- ・ 三塚貴「『万葉集』における「夢」による問答」（『新大國語』11、新潟大學、1985.2）
- ・ 眞下厚「『夢に見ゆ(る)』とうたうことは」（『古代文學』31、武蔵野書院、1992.3）
- ・ 韓圭憲「万葉集の『夢』の歌の考察——發想類型をめぐって——」（『國語國文研究』104、北海道大學、1996.11）
- ・ 菊川惠三「万葉集相聞表現としての『夢』——『俗信の夢』と『自分ゆえの夢』——」（『美夫君志』61、美夫君志會、2000.11）
- ・ 菊川惠三「挽歌の夢、相聞の夢——『見ゆ』と万葉の夢歌の世界——」（『万葉人の表現とその環境』日本大學文理學部、2001）
- ・ 韓圭憲「民俗學的素材を通してみた人麻呂歌集」（『日本語文學』14、韓國日本語文學會、2002.10）

付録【夢の用例一覧】

	相聞	挽歌	雑歌	その他	題詞・左注	計
巻1						0
巻2		150・ 175			162	3
巻3						0
巻4	490・581・591・604・615・621・ 633・639・662・705・710・716・ 718・724・741・744・749・767・ 772・784・787					21
巻5			807・ 809・ 852		794・ 810・ 811	6
巻6						0
巻7			1202・ 1236	1345		3
巻8	1620					1
巻9		1809	1729			2
巻10	2241・2342					2
巻11	2412・2418・2479・2501・2544・ 2553・2569・2587・2589・2595・ 2601・2621・2634・2754・2786・ 2812・2813・2814・2815					19
巻12	2842・2848・2849・2850・2874・ 2880・2890・2912・2914・2917・ 2937・2955・2956・2957・2958・ 2959・2995・3108・3111・3112・ 3117・3120・3128・3142・3162					25
巻13	3280・3281・3283	3324	3227			5
巻14	3471					1
巻15				3639・3647・ 3694・3714・ 3735・3738		6
巻16					3848・ 3857	2
巻17				3929・3977・ 3978・3980・ 3981・4011・ 4013	4011・ 4015	8
巻18						0
巻19				4237		1
巻20						0
計	72	4	7	15	8	106

要 旨

本稿では『萬葉集』に見える夢の歌98首を考察した。夢の歌は、亡き天智天皇が後宮の女の夢に現れた挽歌を嚆矢として、その後、愛を素材とした相聞において多く詠まれていった。様々な障壁によって実際に逢うことの叶わない戀人たちは夢の中での逢瀬を願ったわけであるが、それは夢を見ることは何物からも妨害されず、しかも夢の逢瀬は現の逢瀬と同じ位の満足感を與えたからである。夢は一種の遊離魂現象であると言えるが、體から遊離した相手の魂が自分の夢の中に現れる場合と、體から遊離した自分の魂が相手を訪ねてゆく場合との、二つのパターンがあった。

當時の人々は單に夢を見ることを渴望しただけではなく、夢を見るために積極的に行動した。それは神に祈願したり、呪術的な習俗を利用したりする行為で、前者には「うけひ」（神に祈願する儀式）と「手向」（神に供物を捧げて祈願する儀式）があった。後者には「袖反」（袖を裏返して寝る行為）と「下紐解く」（下紐を解いて寝る行為）、「枕片去る」（枕の片側を空けて寝る行為）などがあった。夢は一種の遊離魂現象であったので、これらは相手の魂を自分の夢の中に引き込む呪術であり、そのようにして得られた夢は『古事記』や『日本書紀』に見られる夢のように、神聖な夢であると言えよう。また當時の人々は何か内容のある夢を見た場合、「夢解き」を通じて自分の運命を豫知しようとしたのであるが、『萬葉集』では何れも夢を見た本人が夢解きを行っている。

いくら満足感を得られたとしても、夢は結局のところ夢に過ぎず、夢の逢瀬後に眠りから覺めれば、反って寂しさが増すばかりであった。呪術を通じて夢を求めた家持でさえも夢の逢瀬だけでは満足できなかったようで、その寂しさを歌に詠んでいる。また夢は比喻表現や副詞としても詠まれているが、それらは夢のはかなさに基づいた表現であると言えよう。

キーワード：遊離魂、呪術、うけひ、手向、袖反、下紐解く、夢占、はかない

투 고 : 2003. 2. 25

2차 심사 : 2003. 3. 22

3차 심사 : 2003. 4. 12

住 所：忠南 天安市 雙龍洞 一成 507-503

電 話：041-572-2857

E-mail：mula@sunmoon.ac.kr